

ワイマール音楽大学十芸術学科交流講演2014

はじめに——交流の経緯など

樋口隆一

ドイツ学術交流会（DAAD）の「独日韓大学間提携助成金」の適用を受けて、芸術学科がワイマールのフランツ・リスト音楽大学音楽学科と学術交流を始めたのは二〇〇八年のことであった。交流の発端はたしか二〇〇五年に、同大学の学長で著名なピアノリストでもあるロルフ・ディーター・アーレンス教授が来日され、日本の教育機関との実質的な交流を求められたことによる。明治学院大学の場合、文学部に芸術学科はあるものの実技教育はやっておらず理論的研究が中心なので、音楽学科との交流なら可能かもしれないとお答えした覚えがある。

翌二〇〇六年六月、樋口が芸術監督を務める明治学院バツハ・アカデミー合唱団はライプツィヒ国際バツハ音楽祭に出演し、聖ニコライ教会での聖霊降臨祭礼拝でバツハのカンタータ《かくも神は世を愛したまへり》BWV六八ほかを演奏した。

さらにバツハ生誕の地であるアイゼナハの聖ゲオルク教会でも演奏会を予定していたため、アルンシュタット、ワイマールなどのバツハが活躍した町々を巡る小旅行を行った。そこでワイマールに滞在した折に、フランツ・リスト音楽大学にも表敬訪問を行ったのだった。すると、音楽学科の主任教授でドイツ音楽学会会長として知られるデトレフ・アルテンブルク教授が待っておられた。お互いにどうも初対面の気がしなかったが、話しているうちに、二〇〇三年五月にライプツィヒのバツハ・アルヒーフで行われたシンポジウム「音楽手稿譜の修復とデジタル化」に参加しておられたことがわかった。そのときは私も『新バツハ全集』の校訂者のひとりとして発表をしたので、覚えがあつて当然なのだった。

広大な音楽学科の校舎と図書館を案内して下さったが、図書

館には当然ながら『新バッハ全集』（全一〇八巻）のコーナーがあったので、自分が校訂した巻を抜き出して「これが私の仕事です」と言ってお見せしたところ、大喜びされ、なんとサインをしろと言われる。図書館の本に書き込むのは気が引けると断ったが、「構うものか。良い記念だ」などと言われるので、断り切れず、禁を犯したことを告白しよう。いずれにせよそんなアルテンブルク教授の豪快な人柄に魅了されたことも事実である。（図版1）

ホテルまで送って下さる途中に、教授の官舎に立ち寄って下



図1



図2

さった。それはなんと十九世紀には作曲家のリストが、ヴィトゲンシュタイン侯爵夫人と愛の巣を営んだ「アルテンブルク」の館にほかならなかった。かつてレーゲンスブルク大学教授だったアルテンブルク教授は、ワイマール音楽大学からのスカウトを受諾する決心をした大きな理由のひとつが、ご自分の名前と同じこの「アルテンブルク」館に住めるということだったと言われたが、大いに納得したものである。なんでも階下は「フランチ・リスト研究センター」やリスト・ザールなど公共の施設があり、官舎は最上階とのことであった。（図版2）

交流のもうひとりの立役者は、若い音楽学者のシュテファン・メンツェル君である。彼は当時、アルテンブルク教授が指導する博士後期課程生で、日本の近現代音楽における和楽器の使用に関する研究を志していた。今から考えると、彼の向学心と努力と、それを支えようとするアルテンブルク教授と私の意志が大きな駆動力となり、この交流事業が発展したともいえる。二〇〇七年度、メンツェルさんはまず日本語を学ぶためにDAAADの奨学生として東京大学に留学したあと、引き続き明治学院大学で私の指導のもとで所期の研究を行いたという。アルテンブルク教授と私は、彼の研究活動を軸として、両大学の交流事業を発展させるべく、DAAADの「独日韓大学間提携助成金」に応募したところ、幸いにもまず二〇〇八年〜二〇一〇年の三年間の助成が採択



図3 (左から)アルテンブルク教授、大西学長、ヤンゼンDAAD東京事務所長、樋口



図4 公演中のアルテンブルク教授と樋口(通訳)

され、さらに二〇一二年までの二年間の延長が許された。そして二〇一三年は小休止となったが、二〇一四年から二〇一五年の再延長も許可され、現在に至っている。メンツェル君は二〇〇八年から二〇一〇年、言語文化研究所の研究員として本学に留学し、帰国後はワイマール音楽大学の助手として交流事業の実務を担ってくれている。二〇一四年にはワイマール大学でめでたく博士号も取得し、気鋭の研究者として活躍している。交流事業の根幹は、教員と学生が相互に訪問し合い、学術的な意見の交換を行うことである。まず二〇〇八年十二月に

は、アルテンブルク教授が来日され、本学における樋口の講義やゼミのなかで精力的に四つの講演をされた。まず十二月八日(月)、大学院ゼミでの「リストの標題音楽理念 *Istis Idee der Programmusik*」(ドイツ語・英語)を皮切りに、十二月十一日(木)には「モーツァルトの《魔笛》における隠喩と様式の引用と統合 *Allusion, Stilizat und Stilsynthese in Mozarts Zauberflöte*」(樋口の邦訳は『藝術学研究第一九号』に所載)、十二月十二日(金)には横浜校舎で「音楽と文化的アイデンティティ *Music and cultural identity*」(英語、加藤拓未通訳)と「リストの手からヴェルディの精神を——十九世紀ヨーロッパにおけるオペラ編曲と理念転換 *Verdis Geist aus Listis Händen: Operantarskription und Ideentransfer im Europa des 19. Jahrhunderts*」(樋口通訳、小林幸子の邦訳は『言語文化第二七号』所載)と続いた。横浜校舎で行った最後の二つは、学部一・二年次生対象であり、正直のところ難しすぎるかと思ったが、それは杞憂にすぎなかった。講演後、若者たちは口々に感動と感謝の言葉を私たちに伝えてくれたのである。私たちはこの体験によってすでに交流事業の意義の大きさと確実な手応えを感じていた(図版3・4)

この年、本学からは、三人の短期留学生をワイマールに送り込んだ。まず八月、同じワイマールにあ

るバウハウス大学によるドイツ語夏期講座でドイツ語の特訓を受けたあと、それぞれ博士前期生と学部四年生の二人は九月をワイマールで過ごし、卒業生の小山田薫さんは、さらに十二月まで滞在してドイツの学生生活を楽しんだ。小山田さんはその後、本格的なドイツ留学を志し、現在はライプツィヒ音楽大学で教会音楽を学んでいる。

二〇〇九年の事業の大半は、メンツェルさんの日本での研究生活が中心となったが、それはそれで私たちにとっても大きな成果があった。大学院の樋口ゼミでは、フランクフルトに本部を置く「国際音楽資料情報協会RISM」のデータベース作成のためのマニユアルの日本語版を作成していたのだが、メンツェルさんの参加は大きな助けとなった。ドイツ語原文の細かいニュアンスについてはもちろんだが、彼が難しい漢字まで知っているのには驚かされ、それがまた日本人学生にも大いに刺激となったに違いない。

二〇一〇年は、樋口のワイマール訪問で始まった。五月二十五日、ワイマール音楽大学音楽学科でさせていただいた公開講演のテーマは「日本の西洋音楽一五〇年 150 Jahre Europäischer Musik in Japan」。日本近代音楽館の本学図書館移管に腐心していた私にとっては、まさにタイムリーなテーマでもあった。ワイマール音楽大学の教員・学生のみならず、当時私が共訳を進めていた『このくちづけを世界のすべてに——ベートーヴェンの危機からの創造的飛躍』（アカデミア・

ミュージック株式会社、二〇一三年）の原著者で元ドイツ連邦議会議員のエリカ・シューハルト女史もハノーヴァーから駆けつけてくださるというハブニングもあり、大いに盛り上がった。この講演が引き金となり、翌二〇一一年にはベルリンのフンボルト大学、日本大使館、ヴォルフエンビュッテルのアウグスト公爵図書館、ライプツィヒ大学で連続講演をさせていただくことになった。さらに二〇一二年には、国際音楽学会の副会長に選挙された。私自身の国際的なキャリアにとっても大きな飛躍の第一歩となったと言っても過言ではない。

八月からは加藤拓未、阿久津三香子の二名の博士課程後期生が二ヶ月の短期留学をし、さらに博士前期生一名、学部生三名が、八月の語学留学に参加した。そして九月二十四日（木）、二十五日（金）の両日には、帰国して助手になったばかりのメンツェル君が来日し、なんと日本語で「ワイマール音楽大学の音楽学科について」という講演を学部生のためにしてくれた。日本語を初めてわずか四年でここまで上達したことは、それを聴く日本の学生たちも大きな驚きであった。十二月にはヘレン・ガイヤー教授が来日され、十二月十三日にアートホールで「十七・十八世紀ヴェネツィアの養育院と音楽」（英語、加藤拓未通訳）という興味深い公開講演をしてくださった。

二〇一一年はいうまでもなく東日本大震災の年で、予定されていたワイマール音大生一名の本学への留学も中止となったが、本学からは、博士前期生の尾白拓哉君と六人の学部生が八

月・九月の短期留学にかけた。秋になると、余震も多少沈静化してきたので、ドイツ側からはなんとか交流事業を続けたいとのメッセージがあった。そして年も押し詰まった十二月には二人の助手が来日し、十五十六日にはニコ・トーム助手が「二十一世紀ヨーロッパにおけるポピュラー音楽の概観」(英語、加藤拓未通訳)を、そして十二月二十二日にはシュテファン・メンツェル助手が「中世ルネサンス音楽資料読み方入門」という講演を当然のように日本語でやってくれた。どちらも学部生たちに大歓迎されたことは言うまでもない。またトーム助手は大学院ゼミで、アイゼナハにあるジャズに関するコレクション「Lippmann+Rau-Musikarchivについて」という講演をしてくれたが、このころになると本学の大学院生たちも慣れてきて、英語なら特に通訳を必要としなくなったのは大きな進歩である。二〇一二年も交流事業は八月から始まった。博士後期生の阿久津三香子さんをリーダー格に、七人もの学部生がドイツ語講座を中心とした短期留学を享受した。彼らの場合、渡航費は自前だが、博士後期生には月額一〇〇〇ユーロ、学部生には六五〇ユーロの奨学金が支給されるほか、ワイマールの学生寮にも住まわせてもらえるので、学生たちはみな素晴らしいドイツの夏を満喫して帰ってくる。旅行は自己責任だが、いざというときには日本語が堪能なメンツェル助手が助けられると思えば、送り出す方としても安心である。

九月二十七日(木)には毎年来日するメンツェル助手による

講演「伝統演劇に見られる江戸時代の女性像——恋愛と生に関する一考察」が、もちろん日本語で行われた。内容は最近、ドイツで発表したものとかで、よくまとまっていたが、日本語の上達もまた嬉しいことだった。

十二月にはヘレン・ガイヤー教授が再来日された。ガイヤー教授は十二月十七日、大学院のゼミで「演劇的・音楽的概念としての崇高——ヘンデルなどを例に Sublimität-Erhabenheit: Dramaturgisch-musikalische Konzepte—am Beispiel Händels und anderer」という講演をされたが、これは美学・演劇学・音楽学を横断する学際的な内容だったので樋口が通訳した。このときはガイヤー教授の夫君で、元アイゼナハ・バッハハウス館長のクラウス・エフナー博士も一緒に来日され、十二月二十日、学部生のために「バッハだけではでない。十八世紀ドイツのプロテスタント・カンタータ Nicht nur Bach. Die protestantische Kantate des 18. Jahrhunderts in Deutschland (樋口通訳)」という素晴らしい講演をしてくださった。エフナー博士はアイゼナハの「テューリンゲン・バッハ音楽祭」の会長でもあり、バッハ一族やテレマンなどの研究家としても世界的に著名な方なので、非常にわかりやすく、しかも内容豊富な名講演であった。

一年間の小休止を挟んで、二〇一四年には交流の第三期がスタートした。八月のパウハウス大学ドイツ語講座には、博士前期生の山口英里さんと四人の学部生が参加した。山口さんは大

学院に入ったばかりだったので、ドイツ語の講読でも春学期にはまだまだだったが、秋学期になると見違えるように読めるようになっていた。ワイマールのドイツ語講座を挟んでのピアノ・アフターに、交流事業の成果を見る思いがした。

秋学期にはワイマールから気鋭の研究者一人の来日があり、これまでにない成果を挙げた。まず九月にはカイ・シャブラーム助手が来日し、二回の公演を行った。九月二十二日(月)の大学院ゼミでは「音楽の起源と発展について——一六〇〇年以前の音楽史記述における諸問題」。英語だったので特に通訳は付けず、十八世紀の文献の引用のみ、博士課程後期生の長島史恵さんに翻訳をお願いした。九月二十五日(木)の学部の授業では「統一という構想——十八、十九世紀交響曲の循環理論についての考察」。ドイツ語ではあったが、博士課程後期生でT Aも務めている昇(旧姓尾白)拓哉君に通訳と翻訳をお願いした。

十一月十五日(十二月二十二日)、ワイマール音楽大学から博士課程後期生のベネディクト・シュベルト君が来日した。バッハを専門としているので、樋口の大学院ゼミに参加し、日本のバッハ受容についても調査研究したいということなので、言語文化研究所研究員になってもらった。そこで、やはり同様なテーマで文科省留学生として東京藝術大学で研究生をしているグラスゴー大学のトーマス・クレッシー君にも紹介することができた。クレッシー君が本学の日本近代音楽館に調査に来たの

で、ふたりの出会いが可能となった。クレッシー君は、日本のバッハ受容に関する彼の研究の中で、バッハ研究者・指揮者としての樋口の活動についても書いてくれるつもりらしく、樋口が指揮する明治学院バッハ・アカデミーの練習や演奏会にもまめに足を運んでくれる。

シュベルト君の講演「「いらんよ——どい」を——われらの罪を」、『《マタイ受難曲》BWV244冒頭合唱の形式と内容への考察』は、十一月二十四日(月)の大学院ゼミで行われた。その内容は、すでにヨーロッパを代表する音楽学の専門誌 *Archiv für Musikwissenschaft* に掲載されたものであるが、このたび邦訳を本誌に掲載することを許可していただいた。講演通訳と論文翻訳は、博士課程後期生の阿久津三香子さんをお願いした。彼女はたびたびワイマールに短期留学しただけでなく、二〇一三年秋からは一年間ウィーン大学にも留学してドイツ語の力をつけてきた。すでにサントリーホールでのオットー・ビーバ博士(ウィーン楽友協会資料室長)の講演通訳にも抜擢して成果を挙げてきた。通訳とか翻訳とかは、場数を踏んでこそ力がつくもので、次々に難しい試練を与えることが指導教授のつとめだと思っている。

ワイマール音楽大学との交流事業とはほぼ並行して、元ペーターヴェン全集編集主幹でボンのペートーヴェン・ハウス博物館長も務められたエルンスト・ヘルトリヒ博士の招聘も、本学における音楽学の大学院教育には大きな貢献をなしたと確信して



図5

いる。ヘルトリヒ博士は、まず二〇〇八年春学期に招聘教授として来日され、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、パガニーニ、ショパンなどの楽譜校訂の体験に裏付けされた資料研究の実際について、大学院の樋口ゼミを共同担当することによって教えられた。さらに二〇〇九年には、メンデルスゾーンやベートーヴェンに関する連続講演もしてくださり、ドイツの音楽学の最前線の成果を教えてくださいました。樋口を主査として博士論文を提出できた寺本圭祐、加藤拓未、小林幸子、久保絵里麻の四君、そして現在博士課程後期に

在学しながら博士論文を準備中の諸君が、おのずと国際的な視野をもって研究を続けてくれるようになったのは、こうした努力の結果であると思います。

本年度退職にあたり、二〇一五年二月二十一日(土)には最終講義「バッハ研究と私」をとりおこなうことができたが、たいへんなサプライズがあった。ド

イツが学術・文化の国際的交流に貢献した人物に与える「テオドル・ベルヒェム賞」が、おどろいたことに私に授与されるというニュースを、D A A D東京事務所長ウルズラ・トイカ博士が発表されたのである。その理由のひとつには「独日韓大学間提携助成金」をつかったワイマール音楽大学と明治学院大学文学部芸術学科との長年にわたる交流事業の運営もあったと聞く。隠れた努力を見られている人がいるというのは、まことにありがたいことである。(図版5)